

後世に残るアートとは



サザビーズジャパン代表取締役会長兼社長 石坂 泰章

— はじめに

サラリーマンから美術の世界に転じてかれこれ36年。その間数知れずの美術館、コレクションを訪ね、数多くの名品に出会う機会に恵まれた。ニューヨークの MOMA(近代美術館)に至っては、少なくとも100回は訪れただろうか。それでも、毎回同館の名画の前に立つと心を揺さぶられる。パブロ・ピカソの「アビニヨンの娘たち」、ジャクソン・ポロックの抽象画の名作「ナンバー31」、ポール・セザンヌの「水浴の男」等数え上げればきりが無い。

このように、サステナブルなアートは数十年、数百年、ときには数千年の時空を超えて人々の心に訴える。一方では多くの絵画が歴史の彼方に消え去っていく。その両者を分け隔てるものとはなんだろうか。それは、英語でいう「test of time」、つまり「時の試練」に耐えるか否かにかかっている。

— パラダイムシフト

最初の「時の試練」は、作品を目にした数日後か数ヶ月後に訪れる。当初は派手な色彩に魅かれたものの、時とともに輝きを失っていく作品もあれば、丁寧に汁をとった料理のように、味わえば味わうほど味わいの出てくる作品もある。

ここで、まずは装飾的で本質をついてない作品がふるい落とされる。工芸と異なり、どれだけ手間暇をかけているかは関係ない。パラダイムシフトしているか否かが鍵となる。パラダイムシフトとは、その時代の支配的な考え方、価値観を大きく変えることだ。たとえば、ピカソのキュビズムは正面、横等からとらえた顔を一つの画面に収めた。従来は、一つの視点からとらえた顔だけを再現していた。キュビズムはまさに遠近法以来の画期的な発想の転換で、後々その影響は絵画のみならず、ひろく彫刻、建築等にまで及んだ。キュビズムのように技法的なパラダイムシフトもあれば、ミニマリズムのように物事を最小限の方法で表現するというコンセプト的なパラダイムシフトもある。

アートで多くのパラダイムシフトが可能なのは、アートに実用性が求められていないからである。建築、ファッションではそうはいかない。出入口がないなど機能性のない建築物はありえないし、窮屈で動きにくい身体のサイズに合わないファッションは考えられない。だからといって、アートとこれらの分野がまったく無関係かということ、そうでもない。以前は機能性を要求される建築、ファッション、デザインに対してアートの影響力が一方的に強かったが、近年はアートとこれらの分野が相互に影響しあっている。

ここまで説明すると、「とはいっても、印象派の作品は綺麗だし、市場でも評価されているではないか」

と疑問に思われる方もいらっしゃると思う。ごもっともだ。しかし、実は印象派もいままで説明してきたことと矛盾しない。印象派の作品は、たしかに美術に特に造詣の深くない人にもわかりやすい。なので、単に綺麗ということで評価されていると思われがちだが、そうではない。戸外に出て、光、空気をとらえ、日常的なテーマを描くということは19世紀末では画期的だった。だからこそ、今日に至ってまで評価されている。

— 世代交代

次の「時の試練」は、その作家、コレクターが世代交代するときだ。力のある画商がついていたので生前過大評価されていた作家もいれば、逆に過小評価されていた作家もいる。それからアートとしての実力が今一つだったものの、時代の息吹を描いて必要以上に高い

評価を得た作家もいる。そういう作家は、その時代に対する共鳴感がない次世代で振るい落とされる。美しいパリを描いたエコール・ド・パリの作家で、このような理由で消えていく作家は結構いる。

これを肖像画で考えるとわかりやすい。100年前の肖像画を觀賞するとき、よほどのことがない限り、「誰が描かれているか」よりも作品の完成度に目がいく。これは、現代アートにもあてはまる。アンディ・ウォーホルはマリリン・モンローとエリザベス・テーラーを描いているが、市場の評価には5倍くらいの差がある。それは、後世になっても時代のアイコンとしての付加価値をも持つマリリン・モンローと、将来的には一有名女優として記憶されることになるエリザベス・テーラーとの差でもある。年配の方にはショックであろうが、ニューヨークでさえ30歳以下にエリザベス・テーラーといっても知っている人は少ない。

— 美術史の中における位置づけ

最後になってしまったが、大事なはその作家の美術史の中における位置づけだ。さきほどまでパラダイムシフトとあって、既成概念の打破を唱えていたのと同じ見方をするように聞こえるが、そんなこととは異なる。会社の「名経営者」とはなにかに置き換えるとわかりやすい。ひとによっていろいろ考え方はあるだろうが、ある会社の現在の隆盛をその経営者抜きには語れない、というのが私の「名経営者」の単純な定義だ。

アートにもこれがあてはまる。いい例がピカソだ。現在のアートには随所にピカソの影響がみられ、まさにピカソ抜きにはピカソ後のアートは語れない。そういう意味からも、ピカソは巨匠だ。ピカソの影響から逃れようと、50年以上前に MOMA のピカソ作品を傷つけた作家までいる。ちなみにその作家は、現在著名なアートディーラーとして活躍している。

逆に異端ではあるものの、その作家を美術史に位置付けられないと、そのアートは単に奇をてらったキツクなものとして消える。IT を駆使したアートには早々と表舞台から消える作品が結構ある。それらでは、最先端技術が主で、アートが従になってしまっている。そうすると、先端技術が時代遅れになった時点でアートとしての寿命が尽きてしまう。だから、アートに IT 技術を活用する場合に周回遅れの技術のみを活用する作家は結構いる。

— さいごに

以上駆け足での説明となってしまったが、これら「時の試練」を経た作品が、サステナブルなアートとして生き残る。今回は自分の専門分野である印象派以降の西洋美術が中心の話となったが、他のアート分野でも多少の違いはあっても、本質では概ね一緒のはずだ。

米国の画家エドワード・ホッパーは「アートとは」と問われて、「もしもすべてを言葉で表現できるのなら、自分が絵を描く理由など存在しない」と答えたが、まさにそのとおりで、アートは奥深い。絵画はその中の一つの表現方法でしかないが、もっともサステナブルで後世に残るアートの表現方法だと思っている。

石坂 泰章（いしざか やすあき）

サザビーズジャパン代表取締役会長兼社長。東京藝術大学非常勤講師。成蹊大学法学部卒。三菱商事勤務後、二十世紀美術の画廊を運営。国公立美術館に名作を収め、現代美術の企業コレクションを立ち上げる。2005～2014年サザビーズジャパン代表取締役社長を務めた後、アートアドバイザーを経て、2018年9月から現職。数々の美術品大型取引を手がける。